

第28回シンポジウム「高齢社会を共に生きる」の

実践報告要旨

「防災まちづくりから安住のまちづくりへ—地域が連携して進める見守り社会実験—」

後藤 章次（地縁団体半田市岩滑^{やなべ}区前区長、社会福祉法人半田市社会福祉協議会会長）

名作「ごんぎつね」で知られる童話作家新美南吉の生誕地である岩滑(やなべ)区は1975年県下で初めてコミュニティ推進モデル地区の指定を受け、人と人とのふれあいを最重点に新旧住民の融和を図っている。1998年に再編された自主防災活動が実を結び岩滑区自主防災会が2011年度には総務大臣賞を、また2013年度には内閣総理大臣賞を受賞する栄誉を得ている。

今回の助成事業で防災での取り組みを高齢者全体に広げ、どんな状態になっても安心して楽しく暮らせる岩滑区を目指して取り組んできた。見守りカードによる様々な見守りの実施、災害時要援護者と支援者の交流をすすめるふれあいサロン、認知症高齢者対策に向けた勉強会や捜索訓練などの一連の取組、高齢者などの困りごとに対応するやなべお助け隊の設置など様々な取り組みを実現させてきた。特に最初から目指してきた高齢者同士の見守り見守られる関係を実現する岩滑光システム“ごんの灯り”の開発は全国的にも大きな教訓になりえるのではないかと考える。このシステムの導入に合わせて、近所の高齢世帯が集まって食事会をする朗朗見守りの会の開催など見守り交流を進める取り組みも併せて実施することにより、新しい近隣関係が実現しつつある。

「地方都市における“終の棲家”としてのホームホスピスの可能性」

竹熊 千晶（NPO法人老いと病いの文化研究所われもこう代表）

地方都市は高齢化率も高く独居の高齢者や老々夫婦世帯が激増し、介護保険のサービスだけで家族が長期間介護し家で看取することは困難な状況である。今後の高齢多死社会において将来の看取りの場所は喫緊の課題となっている。一方で地方は持家率が高く、空き家も多い。そこで、空き家であった民家を改修し、2011年2月から24時間365日、介護が必要な人にとって最期の時まで安心して過ごせる家「ホームホスピスわれもこう」を開始した。要介護者と家族のための「終の棲家」としてのホームホスピス、“本当の自宅ではないけれども住み慣れた我が家のようなもう一つの家”である。地域のなかで近隣の住民の支援をうけながら、これまで5名を看取り、現在2軒の家に10名がケアを受けながらともに暮らしている。この2軒のホームホスピスにおいて、住民が様々な形でケアのある暮らしに関与することで、熊本の文化、風土に根付く取組を続けている。